Geo-Communication

ジオ・コミュニケーション NL No.1

「ジオ・コミュニケーション」創刊

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します*。

* Lars Brodersen, *Geo-communication and information design*, Forlaget Tankegang a-s, 2008, p.575

ジオの語源は、英語のgeography のギリシャ語γεωγραφία (=geographia) の接頭語であるγεω (=geo)が起源であり、地球、土地、土壌などを意味します。コミュニケーションは、ラテン語の communicare を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれ、communis（一緒に）、あるいはフランス語のcommune（共同体）、英語の community の語源となっています。

地理情報システムが普及し、さらに様々な情報ツールが開発され、画像化や情報交換が容易になり、「場所」との革新的な対話ができる時代になりました。さらに地球環境問題への具体的な対応が求められている状況において、旧来、 Physical History Research Projectそして Environmental History Research Projectとして刊行して来たニュースレター(=NL)、ワーキングペーパー(=WP) を、新たに、「ジオ・コミュニケーション」(Geo-Communication NL・論文集)として刊行することにしました。

なお、発行元は、これまで同様、香川大学を本拠としている Environmental History Research Project（環境史研究プロジェクト）です。

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授

村山　聡

Rocky Mountains, Colorado, USA,
October 4, 2007

連絡先：香川大学　環境史研究プロジェクト（村山聡）
住所：香川県高松市幸町１－１　香川大学
電話／Fax: 087-832-1571
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp
URL: http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi

歴史学と感性工学—マルク・ブロック『歴史のための弁明』より—

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授　村山　聡

ナチスドイツに対するレジスタンスの指導者であった歴史家マルク・ブロックの遺書がある。中世経済史家として極めて著名なマルク・ブロック（Marc Bloch）は、郷里リヨン方面で、ナチスに対するレジスタンス運動を展開していた。

軍国・似非科学主義の暴力に染め抜かれていたナチスドイツのゲシュタポは、マルク・ブロックを逮捕・投獄し拷問にかけた。そして彼は、1944年6月16日に銃殺された。7月6日生誕の　マルク・ブロックは、57歳を目前にして生涯を閉じたのである。

Apologie pour l'histoire ou Métier d'historien

マルク・　ブロックの遺書は、『歴史のための弁明ー歴史家の仕事ー』と題して、讃井鉄男訳で、1956年に岩波書店から刊行されている。原題は上記の通りであり、1949年に刊行され、またその英訳は1953年に出版されている。

日本語訳の解説によると（同書、179頁）、1940年5月以後のドイツ軍侵入後、マルク・ブロックは、パリの「安全な場所に保存されていたノートから離れ、また箱詰めにして占領軍によってドイツに運び去られたいっさいの書物を奪われて、無為な生活を憎むこの人は、筆を執って歴史に関する思索を紙片に記しはじめた」という。遺稿が執筆されたのは、1941年から1942年頃であると推察されている。この頃から、レジスタンス運動に身を投じたらしい。

同じく同書の解説には、マルク・ブロックの最後の場面を次のように記している。

「1944年6月16日、27人のフランスの愛国者たちは、モンリュックの監房から引き出されて、リヨンの北方約50キロ、トレヴーよりサン・ディディエ・ド・フォルマにいたる道路上にある通称レ・ルシィユの野原に連行された。一行の中には。すでに灰色になった髪と、生き生きとした鋭い眼差しをもった一人の老人がいた。彼のそばには、16歳の少年が震えながら立っている。「あれは痛いでしょうか。」老人は愛情をこめて少年の手をとり、「そんなことはないよ、痛くなどあるものか。」と答える。そしてこの老人は最初に『フランス万歳』を叫びながら倒れた。」（同書、175頁）

二度の世界大戦が引き起こされたヨーロッパにおいて、いずれにもドイツの歴史的責任が繰り返し問われている。

「歴史の対象は、その性質上、人間（l'homme）である。もっと適切に言うならば、人間たち（les hommes）である。抽象に適する単数よりもむしろ、相対性の文法的形態であるところの複数が多様性の学問にふさわしい。風景の目につく特徴、道具、あるいは機械の背後に、また表面上は冷淡きわまる文書やそれを制定した人々とは一見全く無関係に見える制度の背後に、歴史が把握しようとするのは、人間たちである。そうすることのできない人は、せいぜい博識の未熟練労働者にすぎないだろう。良い歴史家とは、伝説の食人鬼に似ている。彼が人間の肉を嗅ぎ出すところ、そこにこそ、獲物があることを、彼は知っているのである。」（『歴史のための弁明』8頁、強調点は省略）。

歴史学は「人間たち」を対象とする。しかし、実は「人間たち」だけを扱っているのではない。マルク・ブロックは、自然科学と人文科学を単純に区別するような発想に反対している。歴史学は総合科学であり、総体としての人間あるいは場合によっては、総体としての地球を対象にするからである。同書、マルク・ブロックは次のように語っている。

「科学は、光線がたがいに結びつきたがいにしみ通るあの交叉するサーチライトの自由な動きのおかげで、現実をいっそうよく観察する目的でのみ、現実を分解する。それぞれのサーチライトが自分だけがすべてを見るのだと主張する時に、また知識の各分野が我こそ本場であると自任する時に、はじめて危険は始まる。

しかしながら、もう一度我々は自然科学と人文科学との間に、何かしら間違って幾何学的な平行関係を自明のこととして仮定することを、警戒しようではないか。私が私の窓から見る景色の中に、

それぞれの学者は全体をあまり取扱わずに、自分自身の題目を選ぶ。物理学者は空の青さを説明し、化学者は小川の流れを、植物学者は草を説明する。私に見え、私を感動させるような景色を再構成する仕事を、彼らは芸術の手に委ねる（もし画家や詩人がその仕事を引受けることを望むなら）。それというのは、統一体としての景色は私の意識の中にのみ存在するからである。さて、これらの知識の形式が実行し、その成功によって正当化しているところの科学的方法の特性は、静観者たることをことさら放棄して、静観された対象物だけを認識しようとするにある。我々の精神が事物の間に織りなす関連は、自然科学にとっては勝手気儘に見えるので、自然科学はことさらこの関連を破棄して、いっそう真正であるように見える多様性を回復しようとする。しかしすでに、有機的世界はその分析者たちに対して特別にもっと微妙な問題を課しているのである。なるほど生物学者は、いっそう便利であるように、呼吸、消化、運動機能を別箇に研究することができる。それらのものより何よりもまず、彼が報告せねばならない個人があることを、彼は知らないわけではない。だが、歴史のむつかしさは、なおちがった性質のものである。というのは、けっきょく歴史はまさしく、人間の意識をその素材とするからである。人間の意識を通じて結ばれる関係、この意識の地盤の上に生ずる汚染のみならず混乱は、歴史の眼から見れば、現実そのものを構成する。」（同書、124～125頁）

歴史学が見つめる「現実」は、人間の意識を通じて結ばれる関係であり、あらゆる地球の混乱も人間の意識の領域の中で理解される現実である。

工学世界でようやく新たな変化が見られるようになっている。日本発の「感性工学」という分野はまだ新しい。広島大学出身の長町三生によると感性工学とは、「人間がある対象について心の中に抱く感性（フィーリングやイメージ）を具体的な形で物理的デザインとして表現するための翻訳システム」であるという。「マンガ」が世界を雄飛しているように、***Kansei*** も同じような道を歩む可能性がないわけではない。しかし、感性とは何かを定義することは決して容易ではない。世界各国の言語において、決して単純には共通理解を得ることができない概念でもある。

日本感性工学会のホームページ（http://www.jske.org/abouts/）には次のような記載がなされている。「日本感性工学会は、1998年10月9日に設立された若い学会です。本学会は、従来の人文科学・社会科学・自然科学と言った枠にとらわれることなく、幅広い学問領域を融合して、感性工学という新しい科学技術を展開している学会です。感性工学は、感性という価値の発見と活用によって、社会に資することを目的としている学問です。従って、感性に関心のある人々ならどなたでも参加していただくことができます．現在学会員となられている方々の学問分野は、哲学、教育、心理、芸術、政治、経済、経営、社会などの人文科学系から、医学、生理学、化学、材料、機械、情報、システムなどの自然科学系など多様な人々が多様な視点から、感性を中心に活動しています。本会の主な活動は、和文論文・学会誌、英文論文誌の発行、春季大会、年次大会や講演会を開催していますが、最も特徴的なことは、多数の部会が講演会を初めとする多様な活動を行っていることです。感性に感心をお持ちの皆様は、年次大会に参加されるかいずれかの部会を覗かれて、ご自身に合った部門を見つけられて、日本感性工学会に入会されますようお願いいたします。また、感性に関心のある方々がいらっしゃいましたら、是非ご紹介下さいますようお願いいたします。」

日本感性工学会の活動についても、さらなる世界展開が期待される。日本語の特性、日本文化の特性が普遍的なものとして理解されるまでにはまだ多くの時間がかかるようにも思う。しかし、ある意味ではこの方向は世界的な潮流でもある。

感性に関する英語の表記では、下記にあるように多くの概念に細分化される。

言語文化の異なるそれぞれの地域で感性は多様に表現されているし、多様に理解されていることが分かる。しかし最近では、間違った判断や選択の合理性欠如を

糾弾するよりも、政策的な決定に関しても感性（emotion）が注目され、たとえば、ハーバードの政策科学系の大学院であるケネディスクールなどでは、「決定科学」（Decision Science）という学問分野が登場し、間違った判断や選択が予見できるものかどうか分析されている。分析的理性の科学にまた一つ新たな分野が誕生した。

マルク・ブロックの文章に帰ろう。彼が語る歴史学は、感性も理性もすべてを含んだ人間の総体を扱う。そのことを通じて、社会も地域も、ひいては自然も対象にすることができる。しかし、それだけに分析的には常に難しさを伴う科学である。

マルク・ブロックは、「歴史は何の役に立つの」という素朴な疑問に、至るところで「死」を見つめていた時代を背にして、真摯に応えている。直感的な意識内以外には、総体が見えないことについては今も変わりはない。しかし、あまりにも脆弱な社会を築き、あまりにもグローバルネットワークの中で翻弄される社会の中で生きざるを得なく、また、迫り来る地球環境の厳しさの中で、人類生存の危機を迎えているように思う。ここに至って初めて「科学」がようやく総体としての人間の感性に歩み寄りを見せている。

まだ詳細を正確に確かめているわけではないが、日本感性教育学会の会長である相馬一郎が講演で感性の語源について紹介をしている。（http://www3.omn.ne.jp/~michiko3/kouwa.html）

感性に関する英語表記

sensitivity, sense, sensibility, feeling, aesthetics, emotion, intuition

感性の語源は、古くはアリストテレスのアイステーシス（aisthesis）、つまり、感性・感覚を意味する古代ギリシャ語であり、同じくエートス（ethos）と近似した意味を持っていると考えられているようだ。

ドイツの18世紀の哲学者であるアレクサンダー・バウムガルテン（Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762）が、1750年に出版した著作において、初めて「感性的認識」という言葉、ラテン語の aesthetica を用いて「美学は感性的認識の学である」と定義したとされている。

つまり、自然美と芸術美に関する学問として「感性学」を標榜したのであるが、この概念を日本では「美学」と訳した。

Aesthetica est scientia cognitionis senstivae.

この18世紀から19世紀にかけて、現代につながるような自然科学的理解に基づく工学世界がヨーロッパで誕生すると同時にそして踵を接して、光を巧みに使う印象派の絵画が登場してくる。

次の二つの写真は、2009年3月に筆者が撮影したライン川の支流キンツィッヒ川である。ある橋から上流を写した写真が上の写真であり、逆に下流を写したのが下の写真である。

キンツィッヒ川（村山撮影1）

キンツィッヒ川（村山撮影2）

19世紀から20世紀にかけて、自然はあくまでも克服され制御すべきものとして把握された結果、登場したのが直線化された河川景観であった。

その後、生物多様性への配慮や自然の治癒力ほか自然環境への理解が進み、再自然化の運動が活発になり、あえて堤防を壊し、近自然的な姿としたのである。これが同じ川で観察できるのが現在である。

19世紀から20世紀にかけての歴史的過程が現在の工学技術偏重の社会を生み出し、結果としては、歴史家マルク・ブロックを処刑するという愚を犯すような政府を登場させたとも考えられる。この点はまた次回に紹介したい。